

第 65 回日本生殖医学会

P-056

WEBkaisai

,

2020.12.3-23

低出力レーザー治療（LLLT）は妊娠率を改善するか

HORAC グランフロント大阪クリニック 姫野隆雄 森本義晴 福田愛作

低出力レーザー治療が不妊治療で使用され始めてから約 20 年が経過しようとしている。2006 年に世界初のレーザーリプロダクション学会が日本で誕生している。他科では以前より疼痛治療や温熱効果による疾患への治療が行われていたが、不妊領域においても末梢循環を改善し、子宮や卵巣の血流を良くし、また星状神経節照射を行うことで脳循環を改善し内分泌動態を活性化することで不妊治療成績が高くなると考えられている。当院での LLLT と治療成績をいくつか示したい。まず低刺激周期における LLLT 治療の有無による、採卵数、成熟卵数、受精卵数、について 118 症例（ 41.6 ± 3.4 歳）について調べたところ成熟卵数と受精卵数で優位な改善が認められた。次に反復不成功例での HRCFET 周期での妊娠率を LLLT を受けていない移植周期（前）と受けた周期（後）で分割期胚移植と胚盤胞移植、2 段階移植で妊娠率を比較したところ、分割期胚移植では有意差が認められた。胚盤胞移植、2 段階移植においても改善傾向が認められた。

最後に ET 直前に LLLT を実施群と非実施群の妊娠率を比較したところ実施群で 44.8% と優位な妊娠率の上昇が認められた。（考察）LLLT は大きな副作用も

なく妊娠率の改善が期待できる方法であると考えられる。今後も更なる臨床経験の蓄積を期待したい。